

## 北海道日食観測隊を訪ねて



6月19日の皆既日食を目指して眞理探究への熱情に燃やされ、千里の道を遠しともせず、朔北の寒村に現代科学の十字軍を進める内外観測隊を訪ねんと、山本臺長に随伴して、一路北海道へ向つたのは去る5月17日の晩だつた。合服で出掛けたものゝ、東北の地に近づくに従つて車窓に残雪を見、合服の下にジャケツやら冬シャツを着こむ。函館で櫻を、

札幌で寒つ風を経験して、今年は2度の春と冬とに對面した形。旭川を経て音威子府で乗換、小さい汽車に乗つて愈々北海道へ來た心地、寒い車内で丸いスト1ヴに暖を取り乍ら、花山第2観測隊の中頓別に向ふ。車窓に大小の切株の並ぶ開墾地と所々に建てられた農家を過ぎて中頓別着。こゝは村から4軒も奥へ行けば小熊が見られるといふ北海道の中の北海道で木材と澱粉の集散地。この邊は北緯45度線を超ゆる高緯度地方、遠くカムチャツカから吹き送られた寒氣はオホツク海を涉つて、身に沁むが、盆地となつて居る爲、不斷は風もなく、ガスのかゝる憂へもない好観測地の様子。小山理學士を中頓別小學校を訪ねたのは20日の午前だつた。作法教室を臨時宿泊所とした小山氏の部屋にはスト1ヴがたかれて居る。相憎の大雨の中を運動場西隅に基礎工事の始まつた観測地を視察。秀峰敏音知山も半ば雲に掩はれ、最近發見されたといふ鐘乳洞附近の軍艦岩も残念ながら見えない。こゝの中頓別神社の神輿をかつぎ出せば晴天100パーセントだと意氣込む村民達の笑顔に見送られ、濱頓別を経て枝幸に向ふ。密雲低く垂れ罩み、絶壁に迫るオホツク海の荒波を左眼下に一路南下、20軒の砂丘上の泥濘道を4時間近くもまれもまれて、夕方近く日食の枝幸か、枝幸の日食かで名高い枝幸の村に入つた。

花山の元氣満々たる稻葉、柴田、荒木(九)、荒木(健)の諸氏と顔を合せる



間もなく、村の有力者等とバスに同乗、枝幸小学校運動場の観測地を視察、こゝも連日の悪天候で泥濘、観測地は杭を打ち込んだのみ、雨天體操場で荷物の整理中。西方に三笠山を見上げて40年前の米國トツド博士等一行の面影が泛んだ。オホツク海に面して居る爲、午前中はよくガスに困らされる由であるが、午後はよろしいとの話、花山観測隊の中心地であるから特に成功を祈る。村の女子青年學校を根城とした花山人の居間は小綺麗な文化住宅、スト1ヴを圍んで立派な椅子に話は湧く。晩は村主催の歓迎會に臨む。以前よりも戸數の増えないといふ人情味豊かな枝幸の村に祝福あれ。山本臺長より本年度の新彗星としてコペンハーゲン天文臺よりの來電が披露される。京都出發後4晩目初めて宿の疊で眠る。日食記念の手拭と風呂敷を頂く。

翌21日早朝瀧本村長、泉谷北海タイムス特派員等と同車、懐しい枝幸に別れを告げて、京大上田穰博士等の観測地雄武へと又バスを走らす。

前日と同様、バスそのものが内地の使ひぶるの上、悪道と來てゐる。小さい橋が所々落ちた儘なので、迂回しつつ車は進む。これでは水が出れば通行止。枝幸を出發して數刻、道は幌別川原野の一角を横ぎつて進む。河畔の所々に白樺繁る丘陵の地は、その昔北見アイヌと十勝アイヌが鉾を交へ、石鏃の矢を飛ばし、血と肉とを以て國境の防備線を死守した古戰場と聞かされ、眼を閉づれば水面にカヌーを操る酋長等の姿が泛び來つた。蛭々20軒に渉る枝幸村區域は凡て熊笹の原野、この山奥には枝幸より選抜された篤農青年が開墾に従事してゐるとか、路傍には多種類の内地では3000米級の山岳地帯で無ければ見受けぬ高山植物が青芽ふく遅き春を感じた。左手には遙かにカムチャツカに連るオホツク海の波は静かだつたが、沖一帯はガスが深く垂ち罩めて居た。右手の彼方には宗谷、天鹽の國境山脈が殘雪を被つて眞白く浮ぶ。下幌別砦址を後に、4時間を経て雄武に着く、雄武より興部を経て花山第3観測隊の遠輕に向ふ。

町の有力者連に出迎へられ、驛前で記念撮影をして直ぐ、町より4軒許り

離れた社名淵の家庭学校の観測地へ、青々とした麥の畑をぬいつい、車を走らす。10萬坪もあるといふ家庭学校構内の簡素な樹下寮に小憩、小雨の中をクロバ1の舊テニスコートに山本臺長は主任高城氏が未着である爲、望遠鏡据附の2地點を選定さる。よく開墾の行き届いた丘陵の半ばまで麥のカ1ベット、東方は白楊、白樺、榎立ち並び、西方の山は平和山と呼ぶ内地の晩秋を感じる樹々の色彩。こゝ望みの丘には禮拜堂が聳え、夕べには僅か10名許のヨール天を着た教師と30數名の生徒等の讚美歌と祈禱の調が洩れる敬虔な少年達の道場だ。

晩には遠軽小學校で山本臺長の日食に関する通俗講話があり、聴集者數百名にのぼつた。

遠軽ホテルに1泊、翌22日早朝、遠軽の名所巨大な瞰望岩を車窓に眺め、上斜里に向ふ。車窓に展開する景色、池畔に影を浸す多肉性の白花水芭蕉、美しい網走湖、若草を三々五々と食む放牧の母馬によりそふ仔馬。

上斜里驛に出迎へた赤ら顔の、外人にしては脊の低いガツチリと

したストラトン博士と堅い握手を交す。抑揚の目立たない發音だ。廣い通りを1軒程徒歩で英國隊観測地上斜里小學校に着く。ヨール天の洋服を着た兒童達、海老色の角巻を頭からすつぽり被つた農女達が、いともいんぎんに一行に禮をする。ストラトン博士はいつの間にかストン博士の稱號で親しまれてゐるといふ。

校舎の裏側に裁縫室を改造したといふ獨立した簡素な平屋こそ英國ケンブリヂ大學天文臺長ストラトン博士一行の宿泊所だつた。

宿舎の背景には記念樹として植ゑられたといふ落葉樹の並樹が若芽を覗かしてゐた。遠景には其の半分は白雪の斜里岳が其の雄姿を陽に輝やかして居る海拔1300米。この山に理化學研究所の仁科博士等一行が日食時の宇宙線研



究の爲、300貫の宇宙線観測計を亨々たる針葉樹林帯の尺餘の積雪を冒して、雪解の奔流渦巻く溪を涉つて、山の8合目まで村人達の決死的な奉仕によつて引き上げ、観測小屋に仙人生活をしてゐる由。頂上まで登れば晴天なれば千島の方が見えるといふ。

落葉樹の前の畠に並んだ英國隊の観測陣、2、3のバラク建を除いては當地で徴發したといふ、きらびやかなビーチ・パラソルに護られた観測器、シロスタト6機、赤道儀、カメラの獨立したもの3、4個、セツトは皆で10個、



素晴らしい！ 之だけの機械を校庭の1部に密集させるのは痛快であるが又冒険だと思はれる。少くとも10萬圓の經費をもつて遙々英國より我が北海道へ100餘個の観測器をもつて來た彼等一行6人で、これだけの機械がこなせるのか知ら？ 少くとも20人は人手を要する筈。兎に角やる豫定だと、さすがは日食に一生をさゝげて來たスト

トラトン博士等一行だ。宿舍で彼等と晝餐を共にする。ストラトン、ロイツ、アレン各博士、バグノルド少佐、サツカレ1、レツドマンの巨體に取圍まれて、小學校の先生等の手になつた、主に油上げの簡単なランチ、食卓に花瓶はなかつたが、壁間には彼等の持參したと思はれる誰か科學者の額がかゝつてゐた。椅子の上に無雜作に置かれて居たのはボツカチオのデカメロンだつた。出發以來曇天ばかりだつたのに、上斜里で始めて晴天、美しい白雪の斜里岳に見送られ乍ら、近くの東北帝大の松隈博士等一行の小清水小學校でアイスタイン効果をキャッチせんとする博士の御説明に傾聽。旭川・函館にて新聞記者團の會合に出席。仙臺驛前にて出發以來始めて煌々たる木星を南天に仰ぐ。斯くて花山日食観測隊に山本臺長より各々渡された日章旗が彼等の上に高く翻る日を祈りつゝ、一路歸京の途に着いた。(終) (佐登兒誌す)